

長期的かつ体系的な コミュニケーションスキルプログラムの開発

(小山工業高等専門学校) 柴田 美由紀

1. まえがき

高専においてコミュニケーション能力の育成に対する認識が年々高まっている昨今、高専国語にコミュニケーションスキル教育を根付かせ、より有効な教育実践を行っていくために、高専国語のためのコミュニケーションスキルプログラムの開発が急務となっている。本研究では、まず、平成19年度から21年度にかけて稿者が実践した「1～3学年用コミュニケーションスキルプログラム」の成果について分析する。次に、その反省点を踏まえてプログラムの体系的な整理を行うと同時に、5年間という長期教育が可能な高専のメリットを活かした「1～5学年用コミュニケーションスキルプログラム」を新たに構想したいと考える。

2. 「1～3学年用コミュニケーションスキルプログラム」の分析

稿者は平成16年度より、3学年「国語」において、コミュニケーションスキルプログラムを実施してきた。スキル訓練の項目は「発声・朗読」「スピーチ」「ディベート」「プレゼンテーション」の4つである。プログラム構成は、難易度の低い項目から順に実施していく段階的な構成である。このプログラムを実施した結果、一定の成果が得られることが確認できた¹⁾。しかし、3学年という遅い時期に、スキル訓練の各項目を1回ずつ行う程度では、達成度に限界があった。

そこで、従来の段階的プログラム構成に反復という要素を加味し、1学年から訓練を開始する「1～3学年用コミュニケーションスキルプログラム」(表1)を考案し、試行した。「発声・朗読」「スピーチ」「ディベート」の3項目について、徐々に難易度を上げながら各項目を反復し、段階的な反復訓練を行う構成となっている。例えば、ディベートについてみると、1学年はマイクロディベート、2学年はミニディベート、3学年はフルディベートを実施した。3種類のディベートはいずれも、立論・反駁・最終弁論という試合の基本的構造に変わりはないが、表2に示すように、試合構成人数・

準備時間・試合時間に違いがあり、フルディベートが最も難易度が高くなっている。

表1 「1～3学年用コミュニケーションスキルプログラム」(H19～21年度、[]はコマ数(1コマ50分))

1学年[5]	聴解[1]、発声練習・小説の朗読[1]
	インタビュー[1]
19年度	マイクロディベート[2]
2学年[8]	発声練習・詩の朗読[1]
	2分間スピーチ[4]
H20年度	ミニディベート[3]
3学年[24]	発声練習・ニュースの朗読[1]
	サイコロスピーチ[1]
	3分間スピーチ[2]
H21年度	フルディベート[12]
	プレゼンテーション[8]

表2 ディベートの難易度比較

対象学年	1学年	2学年	3学年
形式	マイクロディベート	ミニディベート	フルディベート
準備時間	0分	50分	250分
試合時間	9分	18分	40分
試合構成人数	1人 vs. 1人 審判 1人	2人 vs. 2人 審判 4人	4人 vs. 4人 審判 32人

このプログラムで1学年から訓練を始めた21年度の3年生(D・A科)は、3学年から訓練を始めた20年度の3年生(D・A科)に比べて、スキルの向上が顕著であった。まず、ディベート試合における発言の積極性に違いが見られた(図1)。稿者は、各々の学生の試合時の発言の積極性について、質と量から5段階評価をつけている。「大変積極的に発言した(有効な発言を2回以上行った)」学生について、H20年度は21%に過ぎなかったが、H21年度はその2倍近い39%となっている。また、学生のスキル向上意識も伸びている。3学年の年度末に学生アンケートを行い、「あなたの聞く・話す能力は向上したと思いますか?」と質問した(図2)。向上したと回答した学生は、22年度は67%であったが、21年度は80%に増加している。

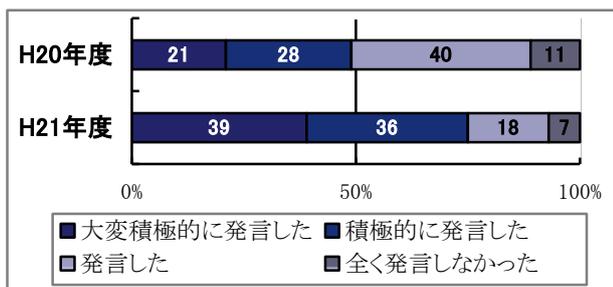


図1 ディベート試合における発言の積極性 (3D・A科 年度別比較)

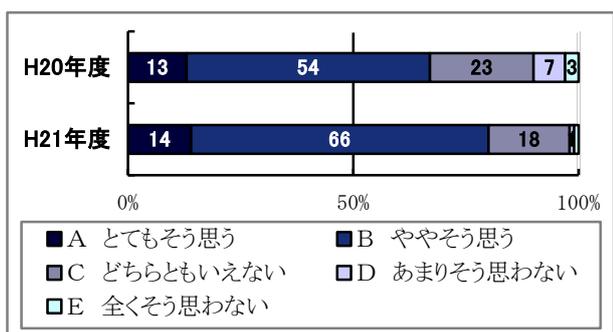


図2 コミュニケーションスキルは向上したか? (3D・A科 年度別比較)

3. 「1～5 学年用コミュニケーションスキルプログラム」の開発

このように、1～3 学年用プログラムは着実な成果をあげたが、さらに2つの問題点が残った。第1に、コミュニケーションスキルという概念が漠然としており、どのようなスキルをどの程度まで獲得することを目指すのか、学生がイメージしにくいという点である。そこで獲得を目指すスキルを〈発表力〉と〈議論力〉の2つとし、〈発表力メソッド〉に「スピーチ」「プレゼンテーション」を、〈議論力メソッド〉に「ディベート」「ディスカッション」を対応させた。また、獲得を目指すレベルを、基礎・応用・発展の3段階に分けた。

第2の問題点は、3 学年までのスキル訓練を「国語」のない4・5 学年にどうつなぐかという点である。4 学年については、「文学」にコミュニケーションスキル教育を取り入れる方法が考えられる。これについては既にすぐれた実践例²⁾もあるのでその先例に学びながら、作者を紹介する15分間の「ペアプレゼンテーション」を今春(H22)より実施しつつある。次に、5 学年であるが、学生にとって、5 年間の集大成となる卒研等の研究発表を迎える学年である。コミュニケーションスキルは公私にわたる様々な場面で生きる能力であるが、特に研究発表の場では、〈発表力〉と〈議論力〉が〈総合

力〉として発揮されることとなる。コミュニケーションスキルを学生自身が自らの研究発表に自在に活かせるレベルに達することを、5 年間を通じた達成目標の1つとしたい。

以上をふまえ、基礎レベルに1・2 学年を、応用レベルに3・4 学年を、発展レベルに5 学年を対応させ、レベル別にスキル訓練の具体的な項目を整理したのが、表3の「1～5 学年用コミュニケーションスキルプログラム」である。5 年という長期間を視野に入れ、〈発表力〉と〈議論力〉について、基礎・応用・発展とレベルを上げながら、段階的に反復訓練してスキル向上を目指す、体系的なプログラム構成となっている。H22 年度より1・3・4 学年の担当クラスで試行を始めている。

近年、コミュニケーションスキル育成は国語科以外でも熱心に取り組まれつつある。科目や学科を越えた連携を図ることで、より有効な指導のあり方を模索することが今後の課題となろう。

表3 「1～5 学年用コミュニケーションスキルプログラム」(H22 年度より実施中)

学年 科目	レベル	発表力メソッド	議論力メソッド
1 学年 国語 3 単位	基礎 I [8]	発声・朗読 サイコロスピーチ	マイクロ ディベート
		グループプレゼン テーション (3分、掲示物使用)	4人グループディ スカッション
2 学年 国語 3 単位	基礎 II [8]	発声・朗読 原稿スピーチ	ミニディベート
		グループプレゼン テーション (3分、以下パワー ポイント使用)	6人グループディ スカッション
3 学年 国語 2 単位	応用 I [24]	メモスピーチ	フルディベート
		個別プレゼンテー ション (5分)	8人グループディ スカッション
4 学年 文学 1 単位	応用 II [6]	総合力メソッド	
		ペアプレゼンテー ション (15分)	質疑応答
5 学年	発展	(研究発表)	(質疑応答)

参考文献

- 1) 柴田美由紀：「表現力を土台にした創造力の育成ーコミュニケーションスキル教育の可能性ー」高専教育第32号, pp. 507-512, (2009)
- 2) 畑村学：「高専生と読む漢詩ープレゼンテーションを取り入れた高学年国語の授業実践ー」高専教育第32号, pp. 177-182, (2009)